

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 17 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320026

研究課題名(和文) 菩薩形弥勒と浄土・現世の交通

研究課題名(英文) Representations of the Bodhisattva Maitreya vis-a-vis the interactions between his Pure Land and the present world

研究代表者

泉 武夫 (Izumi, Takeo)

東北大学・文学研究科・教授

研究者番号：40168274

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,300,000円

研究成果の概要(和文)：兜率天浄土にいる弥勒菩薩の像容は、交脚形から結跏趺坐形に変化し、その途中で半跏思惟形を派生させる。さらに結跏形は倚坐形に変化する。中央アジアから中国・朝鮮半島・日本へと伝播するその図像の変化の過程が、現地調査を通じてより明確になった。また、兜率天曼荼羅が大陸では正面型しかないのに日本中世で斜め型が登場するのは、日本特有の展開とみなされることが明らかとなった。その斜め型が垂迹曼荼羅に应用された可能性がある。浄土という他界にいる弥勒と、現世に示現する弥勒の造形的交渉は、浄土曼荼羅を主軸にして展開したと想定される。

研究成果の概要(英文)：Representation of Miroku Bosatsu(Bodhisattva Maitreya) in his Pure Land, changes in appearance that the cross-legged figure to cross the foot, branching into a form that down one foot on its way. Figure of the cross-legs also changes in appearance to down the legs. Iconography of Miroku, China from Central Asia, further the Korean Peninsula, had been propagated to Japan, the process of the change through the field survey, became clear than before. In addition, as for the Tosotsu-ten Mandara depicting the Pure Land of Miroku, although there is only a front-facing composition in mainland China, the Middle Ages of the Pure Land view of the Japanese composition of diagonal direction has become typical. It will be declared that this is a feature of Japanese Buddhist paintings.

研究分野：仏教絵画史

キーワード：美術史 宗教史 浄土教 図像

1. 研究開始当初の背景

弥勒信仰には、弥勒菩薩が主宰する兜率天浄土をめざす上生信仰と、未来の弥勒仏の出現に値遇する下生信仰とがあり、その二重の性格が弥勒の形や弥勒の変相図に多様なバリエーションを生み出している。その姿の変化の様相については、前回の科学研究費補助金による研究「兜率天往生の思想とのかたち」(平成19~23年度)で概略が明らかになってきたが、なお不明な点が多く残されている。造形面でのさらなる調査と、信仰面での研究がまだ不足している。下生信仰にまつわる造形の展開は将来の課題とし、当面、上生信仰関連の造形に関するさらなる調査研究が必要であると考えます。

2. 研究の目的

弥勒信仰はインド以来の長い歴史をもっている。現在は兜率天浄土で菩薩の姿で常時説法し、未来にこの世に出現して成仏するとされる特異な尊格である。菩薩としても仏としても表象されるのが特色であり、その二重の性格が造像造画におけるはばをもたらしている。とくに菩薩形は、インドから中国、日本に仏教が東漸する過程で兜率天の形象とともに変化した。兜率天弥勒という浄土思想を主眼とする形象に加え、密教的な観想の対象としての弥勒菩薩も盛んに造像される。浄土と現世の空間的關係と時間的回路ないし「交通」が、その背景に横たわっていたはずであるが、そうした問題は整理されていない。本研究では菩薩形弥勒に関して、表象されたかたちがどのような思想と意義づけがなされていたのかを、歴史的・宗教的文脈から説明することを目指す。

3. 研究の方法

(1)本研究は、実地調査による作品研究と、文献・史料による資料収集と作品の分析、からなる。実地調査の対象の分野区分としては、仏画遺品の調査・撮影、仏像遺品の調査・撮影、画像資料の取得に分かれる。主題別研究としては、菩薩形弥勒の単独像、集合像、兜率天弥勒と浄土図(弥勒浄土変)、来迎図に区分けする。遺品の取得画像はデジタル・データ化し、研究への便宜を図る。

(2)文字資料による研究分野区分としては、弥勒上生信仰(兜率往生思想)の歴史的变化と遺品との対応関係、東アジア地域における信仰の共有と差異の明確化、各地域における既存の天概念と弥勒浄土概念の習合のあり方、経塚・埋経などの作善の営みと弥勒信仰との関係の明確化、の諸点に着目して分析を進める。

4. 研究成果

(1)弥勒像の初期の交脚スタイルをめぐって、いくつかの新たな知見が得られた。ベルリンの国立インド美術館所在の仏伝図リリーフの中に、3C ガンダーラ Schist 出土のものがあり、最後の場面は交脚菩薩形で終わっている。これは早期の兜率天宮内弥勒并眷属像と考えてよく、新たな遺品の確認ができた。と

くに弥勒菩薩像の光背が、のちの敦煌莫高窟北魏の彫像にみられる逆三角形であることは重要で、ここにインドと中央アジアの造形的接点が確保できたことは成果である。

また中央アジアの調査では、キジル・クムトラ・クズルガハ・シムシム石窟の諸壁画中に、多くの交脚弥勒像をみとめることができたが、同時に如來說法列図にも交脚仏を観察することができた。さらにその交脚仏に隣接して、交脚ではなく踵を合わせるだけの合踵形の仏像もあることがわかった。交脚は弥勒菩薩だけの特徴ではなく、仏菩薩像の坐形の一般的な一種として考える必要がある。これに加えて、交脚形弥勒菩薩に混じって、合踵形の弥勒像が発見された。これまで報告されていない事実であり、今後さらなる検討が必要になる。

(2)根津美術館本の兜率天曼荼羅図は、日本中世の仏画としては大画面の新出作品である。その調査研究の結果、彩色の状態や描写形式、絹目の組成・密度などを総合的に判断し、14C 南北朝時代の制作であることが判明した。図様は、以前から知られている重要文化財の大阪・延命寺本に似ることが指摘されていたが、研究をすすめるに従い、図様のほとんどが延命寺本と重なることが確認された。両者は直模の関係か、同じ紙形を用いて制作されているといえる。日本中世の兜率天曼荼羅は、図様がまちまちである傾向がある中で、このように共通する図様に描く例はきわめて珍しい。どのような経緯をたどってこうした事態に至ったかたいへん興味深く、さらに史料などからの分析が俟たれる。

(3)兜率天曼荼羅(京都・興聖寺、旧海住山寺蔵)と阿弥陀浄土図(海住山寺)は、近年、奈良国立博物館の「貞慶展」(2012年)などでも展示され、両者の関係が研究者の関心となっている。中世初期に弥勒信仰を中興させた貞慶にまつわる遺品である点でも重要である。大きさがほぼ同等で、構図にも類似性があることから、近い時期に制作されたと思定されている。興聖寺本については前回のプロジェクトで詳しい調査を行ったが、今回、修理後の海住山寺本阿弥陀浄土図を調査することができた。

阿弥陀浄土図は、日本では珍しい斜め構図をとる浄土図で、図様の源は不明である。画面のいくつかの主要モチーフ(架橋、浄土の宝地など)に平面的な金泥文様が使用され、制作年代の判断などに支障をきたしていたものだが、修理時の知見で、これらは後補であることが確かめられ、調査によってこれらの金泥文様部の下に、当初の繊細な截金文様部があることが判明した。これにより、興聖寺本兜率天曼荼羅図との距離がいっしょに狭められ、両者が近接した時期と、類似した背景のもとに制作されたという見通しに、かなりの確信をもつことができるに至った。

兜率天曼荼羅と阿弥陀浄土図のモチーフを比較することを通じて、新たな知見も期待

される。

(4)日本で中世初期から登場する兜率天曼荼羅図は、前回のプロジェクトで整理したように、正面型と斜め型構図に大別され、とくに斜め型が図様としても洗練されていることが指摘された。その淵源を中国大陸の遺例にもとめ、比較的よく知られている敦煌地区の壁画遺品以外にも、中央アジアの諸石窟、南中国の四川地区の諸石窟などを現地調査したが、正面型以外の遺例は今のところ見いだされていない。斜め型の発想の源は今後とも調査しつづける必要があるが、斜め型の流行は日本的な特色である可能性の高いことがおおよそ明らかとなった。

とくに、天治2年(1125)の『僧妙達蘇生注記』には兜率天に往生という文言が複数登場するほか、兜率天の戌亥角の金銀瓦葺屋とか、都率天内院の銀高座などの語句がみられ、兜率天曼荼羅の最古の遺品である興聖寺本の斜め型構図を彷彿とさせるような記述が注目される。今後これらの文言のさらなる分析を通じて、斜め型構図の発生形態を探ることができよう。

(5)日本中世の弥勒菩薩上生信仰を主導し兜率天往生をめざした笠置寺貞慶の兜率浄土観について、近年、貞慶は兜率天往生をなしとげたあとに阿弥陀の極楽浄土への往生をもくろんだとする段階往生説が提出されている。これは重要な問題提起である。段階往生説の根拠は、貞慶作『発心講式』に「慈氏(弥勒菩薩)の化を受け、知足天(兜率天)上・安養浄土(極楽浄土)院に於て、且に弥陀に奉仕せん」とある文言である。ただ検討の結果、これは兜率天から極楽浄土へという移行を明示しているかどうかは不確かであり、中国南北朝時代以来の弥勒と阿弥陀の両浄土を並列しているだけという可能性があることが、訓点の研究などからわかってきた。段階往生説は再検討が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 16 件)

泉武夫、金の誘惑-日本仏画の個性について、美術史学、査読無、37号、2016、pp.1-22
シュワルツ・アレナレス ロール、応徳涅槃図と「四神相応観」-四神の庭から星曼荼羅へ、日本仏教総合研究、査読有、13巻、2015、pp.33-66

長岡龍作、「対敵」の精神と神仏の役割-古代日本の事例に着目して、仏教文明と世俗秩序、査読無、単冊、2015、pp.327-358

泉武夫、仏教美術の図像形成における聖と俗、仏教美術論集 機能論、査読無、5巻、2014、pp.28-43

長岡龍作、蓮華蔵世界と正倉院の屏風、仏教美術論集 機能論、査読無、5巻、2014、pp.200-223

泉武夫、中尊寺蔵金字経見返絵の絵師分担について、佛教藝術、査読有、329巻、2013、pp.45-82

泉武夫、素材への視線-仏画の絵絹、学叢、査読無、34巻、2012、pp.201-215

〔学会発表〕(計 5 件)

長岡龍作、世界としての「蓮華蔵世界」とその表象、研究集会：東大寺要録研究会、2015.9.20、東大寺総合文化センター

シュワルツ・アレナレス ロール、日本仏画-記述する・比較する・展示する ルーヴル美術館極東美術コレクション初代学芸員ガストン・ミジョン(1864-1930)の視線、研究集会：2015年度獨協インターナショナル見えるを問いなおす、2015.12.12、獨協大学

長岡龍作、大乘仏教と東アジアの他者表象、研究集会：檀国大学校日本研究所国際学術シンポジウム、2014.10.31、韓国・檀国大学校

〔図書〕(計 3 件)

泉武夫(責任編集) 日本美術全集 11 信仰と美術、小学館、2015、302

長岡龍作、仏像-祈りと風景、敬文舎、2014、319

泉武夫(責任編集) 日本美術全集 5 王朝絵巻と貴族のいとなみ、小学館、2014、286

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

泉 武夫 (IZUMI TAKEO)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：40168274

(2)研究分担者

長岡 龍作 (NAGAOKA RYUSAKU)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号： 70189108

シュワルツ・アレナレス ロール (LAURE
SCHWARTZ ARENALES)
上智大学・文学部・准教授
研究者番号： 20377013

海野 啓之 (UNNO HIROYUKI)
東北大学・大学院文学研究科・助手
研究者番号： 80587759
(平成 24 年度)

畠山 浩一 (HATAKEYAMA KOICHI)
東北大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号： 90344639
(平成 26・27 年度)

(3) 連携研究者

()

研究者番号：